

經濟論叢

第110卷 第1・2号

企業的マーケティング論の成立……………橋本 勲	1
生産性・分配率・賃金と物価……………小川 登	23
わが国電機産業に対する直接投資……………藤原 貞雄	45
通貨供給と経済成長理論……………西村 理	65
 研究ノート	
レーニンの「辺境地」論……………保坂 哲郎	88

昭和47年7・8月

京 都 大 学 經 济 学 会

《研究ノート》

レーニンの「辺境地」論

保 坂 哲 郎

はじめに

19世紀後半から20世紀初頭にかけてのロシア資本主義の発展は、ロシア中央部における資本主義的農業、工業の発展をもたらしたのみでなく、ロシア南部、東部、東南部などの資本主義化を急速にうながし、封建制との矛盾を尖鋭化させ、ロシアにおける民主主義革命の不可避性、民主主義革命の社会主義革命への転化の必然性を形成していった。

この意味で20世紀初頭ロシア資本主義分析、とくに農業問題の分析にとって、シベリア、カソカーズなどロシア東部、東南部辺境地における資本主義の発展の実態、このような発展とストルイピン改革、とくにその移民政策との関連などは重要な意義をもつ問題である¹⁾。

レーニンは19世紀末の「ロシアにおける資本主義の発展」の時期から、その後一貫してロシア資本主義の「外延的発展」の意味、その実態に注目し、ロシア農業問題の解明に役立っている。本稿の課題は、このようなレーニンの「辺境地」に関する理論を整理し、上述の諸問題の解明に対する基本的視角を明確にすることにある。

I 「ロシアにおける資本主義の発展」段階における辺境地論

1890年代のレーニンの主要著作、「いわゆる市場問題について」(1893年)、「『人民の友』とは何か……」(1894年)、「ナロードニキ主義の経済的内容……」(1894年)、「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」(1897年)、「ロシアにおける資本主義の発展」(1896—1899年、以下「発展」と略す)は、周知のようにナロードニキの哲学、政治、

1) この点について A. B. Фадеев による問題提起がある。「Развитие Капитализма вширь в пореформенной России」(『Доклады и Сообщения Института Истории』выпуск 10, 1956) この問題の研究の意義を、ファデエフは次のようにいう、「ロシア資本主義の統一的経済制度確立の複雑な図、改革後の社会構造や階級闘争の図をより明瞭に示し、ロシアにおけるブルジョア民主主義革命の社会—経済的諸前提を深く解明し、また、ロシアのみでなく、われわれの国の他の民族の歴史的発展の過程を解明することが可能になる」。

「この問題の科学的検討により、革命前ロシアにおける民族の形成、人民の経済的文化的接近、ツァーリズムや封建的、資本主義的抑圧に反対する共同闘争、に関する諸問題の解決を推進」させるし、「さまざまな地域における社会主義革命勝利のための闘争における革命運動の特殊性もまた、はるかに明瞭になるであろう」。

経済の諸理論、とくに経済学に対する批判をその内容としており、その集大成が「発展」である。

「発展」第一章において、ナロードニキの理論的誤り、その幻想性が徹底して批判されているのであるが、この批判体系の中でレーニンはナロードニキの「外国市場」の扱ひ方を次のように批判する。

「ヴェ・ヴェ・氏やニコライーオン氏の誤りは、彼らが剰余価値の実現を説明するために外国市場をひきいれている点にある。……それは、まったくなにか一つ説明せず、ただ彼らの理論的誤りをかくすだけである。これが一面である。他面ではそれは、これらのまちがった『理論』によって、ロシア資本主義にとって国内市場の発展という事実を説明する必要から、彼らをのがれさせてくれる」²⁾。

「資本主義国にとっての外国市場の必要性は、けっして社会的生産物（および特殊的には剰余価値）の実現の法則によって規定されるのではなくて、第一に、資本主義は商品流通が広範に発展して国家の境界外に出ていく結果はじめて現れる、ということによって規定される。……この原因は歴史的性質のものである。……第二に、社会的生産の個々の部分間の照応（価値の点での、また現物形態の点での）は、社会的資本の再生産の理論によって必然的に仮定されたものであり、そして実際には一連のたえまない動揺のうちにつくられる平均的な大いさとしてのみさだめられるのであるが、——この照応は、資本主義社会では、未知の市場のために働いている個々の生産者たちの孤立性によって、たえずやぶられている。相互に『市場』として役立つ種々の産業部門は、均等に発展するものでなく、相互においこしあっている。そして、より発展した産業は外国市場をもとめるのである……第三に、……資本主義的生産の法則は、生産方法の不断の改変と、生産規模の無限の拡大である。……資本主義的企業は、不可避的に、共同体や地方市場や州の境界をこえ、さらにまた国家の境界をもこえて成長していく。そして、国家の孤立性と封鎖性はすでに商品流通によって破壊されているため、資本主義的な各産業部門の自然的志向は、それら各部門を『外国市場をもとめる』必要へとみちびくのである。……最後の二つの原因もまた歴史的性質の原因である」³⁾。

さらに論理をすすめてレーニンはいう、たとえば、農民改革後の時代の当初における繊維工業をとってみると、「国民経済の他の方面の立遅れが古い地区における市場をせばめているならば、彼らは市場を他の地区に、または他の国に、または古い国の植民地に、もとめるであろう。

しかし、経済学上の意味における植民地とはなにか？」と。ここでレーニンは、資本

2) 邦訳レーニン全集、第3巻、42-43ページ。

3) 同上、43-44ページ。

主義的植民地の基本的標識として、次の二つを「資本論」から導きだしている。

第一は、「移住者のたやすく入手できる、占拠されていない自由な土地が存在すること」⁴⁾、第二は、「できあがった世界分業、世界市場が存在しており、そのおかげで植民地が、農業生産物の大量の生産に専門化することができ、それらの生産物と引換えに、『他の事情のもとではそれらを自分で製造しなければならないであろう』ところの、できあがった工業製品をえることができること」⁵⁾である。

このような特徴は、農民改革後のヨーロッパ・ロシアの東部、南部の辺境に見られるし、カフカーズ、シベリア、中央アジアにはいっそうよくあてはまる、という。

「こうして、おのずからつぎの問題が生じてくる、——国内市場と外国市場との境界はいったいどこにあるのか？ 国家の政治的境界をとるとすれば、それはあまりにも機械的な解決であろう。しかもこれは解決であろうか？……このような問題は重要な意義をもっていない。重要なことは、資本主義は、その支配の範囲をたえず拡大することなしには、また新しい国々を植民地化し非資本主義的な古い国々を世界経済のうずのなかに引入れることなしには存在し発展することができない、ということである。そして資本主義のこの特質は、農民改革後のロシアにおいても巨大な力をもって現れたし、また現れつつけている。

したがって、資本主義のための市場の形成過程は二つの側面を表示している。すなわち、——資本主義の内包的発展、すなわち、所与の、封鎖的な地域における資本主義的農業および資本主義的工業のさらにいっそうの発展、および、資本主義の外延的発展、すなわち、新しい地域への資本主義の支配の範囲の拡張、である」⁶⁾。

このように、レーニンは、ナロードニキの考えている「外国市場」の問題が、歴史的性質の問題であることを示したにとどまらず、マルクスの「資本主義的植民地」概念を媒介として、資本主義の「外延的発展」と「内包的発展」という、資本主義発展の二側面にまでこの問題を展開させたのであった。

そして、ロシア資本主義分析における「外延的発展」の研究の意義を強調して、つぎのようにいう、「この著作（『発展』）の企画にしたがって、われわれはほとんどもっぱら過程の第一の側面（『内包的発展』——引用者）だけにとどまった。だからわれわれは、この過程の他の側面がきわめて重要な意義をもっていることをここで強調することを、とくに必要と考える。辺境の植民地化とロシア領土の拡大との過程を、資本主義の発展という見地からいくぶんでも完全に研究するためには、特別な労作を必要とするであろう。ここでは、ロシアは、その辺境に自由で近づきやすい土地が豊富なので、他の資本

4) 同上、627ページ。

5) 同上、629ページ。

主義国とくらべてとくに有利な条件にあるということを、強調しておくだけで十分である⁶⁾。

「発展」がもっぱらロシア資本主義の内包的発展の側面を研究しているのは確かである。しかしレーニンは、資本主義の発展のあり方の、この二側面をつねに区別し、ロシア資本主義の発展をこの二側面の視角からながめようとしていることも確かである。

たとえば、「発展」の第8章「国内市場の形成」において、レーニンは次のように述べている、「……工業人口の増大という現象が純粹の姿で見られるのは、すでに人の住んでいる地域ですべての土地が占拠されているばかりだけである。このような地域の住民は、資本主義によって農業からおしだされるのであって、彼らにとっては工業中心地か他の国に移住する以外には活路がないのである。しかし、もしある地域のすべての土地がまだ占拠されておらず、まだ全地域に人が住んでいるわけでないならば、問題は本質的にかわってしまう。このような地域の住民は、人の住んでいる地区で農業からおしだされても、この地域のまだ人の住んでいない部分に移住し、『新しい土地の耕作』にとりかかることができる。農業人口の増大はおこるだろうし、またこの増人は（一定の期間は）工業人口の増大よりも急速ではないとしても、それにおとらない速さですすみうる⁷⁾。ここで、レーニンは、資本主義の「外延的発展」と「内包的発展」の二つの過程をのべ、「これらの過程を混同することが、人口を農業から商工業的職業に転じさせる過程にかんする誤った考えに、不可避免的にみちびかずにはおかない⁸⁾」と注意し、農民改革後の農業から工業への人口の転出についても、(1) 非農業的一工業的地区、(2) 農業的中部地区、(3) 農業的辺境地方、の3地区に区分し、問題を考えているのである。

さらに、1860年代以降のロシア資本主義の発展は、ヨーロッパ・ロシアの東部、南部、シベリアなどへの「外延的発展」をその特徴としているのであり、これらの地域の分析に際しては、外延的発展の視角からの分析が必然的に入ってこざるをえないのである。例をあげよう。

(1) 第3章「賦役経済から資本主義経済への地主の移行」において、レーニンは「農業出稼ぎ」について次のように述べている、「農業労働者が転入してきたおもな地方は、ベッサラビア、ヘルソン、タヴリーダ、エカテリノスラフ、ドン、サマラ、サウトフ（南部）およびオレンブルグの諸県である。われわれは、ヨーロッパ・ロシアだけにとどめておくがしかし、この運動が北カフカースやウラル州、等々をもとらえながら、ますますすすんでいっている（とくに最近）ことを、指摘しておく必要がある。……このように、労働者の移動は、もっとも人口稠密な地方から、もっとも人口稀薄な植民地方

6) 同上、592ページ。

7) 同上、593ページ。

へ、農奴制のもっとも強く発展していた地方から、それがもっとも弱かった地方へ、雇役がもっとも発展していた地方から、雇役の発展が弱く、資本主義が高度に発展していた地方へと、むかっている。……この逃散がもつばら、人口稠密な地方から人口稀薄な地方への移動だけに偏着すると考えたら、それはまちがいであろう。……労働者の退去は、ただある領域に均等に分散していこうという住民の志向だけでなく、よりよい地方へ出ていこうとする労働者の志向をも、あらわしているのである⁸⁾と分析している。

(2) 第4章「商業的農業の成長」において、商業的穀物生産の発展についてレーニンは次のようにのべている、「……穀物生産の主要中心地の移動がおこっている。すなわち、1860年代と1870年代には、中央黒土地帯の諸県が首位にたっていたが、1880年代にはそれらの県は、ステップ地帯の諸県とヴォルガ下流の諸県に首位をゆずった。……

(この興味ある事実は、ステップ地帯の辺境が、農民改革後の時代には、中央の、以前から人口稠密なヨーロッパ・ロシアの植民地になったことによる。自由な土地が豊富なので、ここに多数の移住者が流れこんで、急速に作付を拡大した。市場めあての作付の広範な発展は、これらの植民地が、一方では中央ロシアと、他方では穀物を輸入するヨーロッパ諸国と、緊密な経済的結びつきをもっていたからこそ、はじめて可能だったのである。中央ロシアにおける工業の発展と、辺境における商業的農業の発展とは、不可分にむすびついて、たがいに相手のため、市場をつくりだしている。工業諸県は、南部から穀物を手にいれ、そこに、自分の工場の生産物を売り、働き手、手工業者……生産手段を……植民地に供給した。この社会的分業によってはじめて、ステップ地帯の開拓農民は、国内市場ととくに外国市場に大量の穀物を売りながら、もつばら農業に従事することができたのである。国内および国外の市場と緊密な結びつきをもっていたからこそ、これらの地方の経済的発展は、これほど急速にすすむことができたのである。そして、それは資本主義的発展にはかならなかった。というのは、商業的農業の成長とならんで人口の工業への転出の過程、都市の成長と新しい大工業中心地の形成との過程もまた、同じように急速にすすんだからである⁹⁾。

(3) 第5章「工業における資本主義の最初の段階」において、レーニンは次のようにいう、「農民改革後のロシアでは、資本主義発展の第一歩をあらわしている小営業の成長は、二通りに現れてきたし、また現れている。すなわち、第一には、小営業者や手工業者が、古くから人が住んでいて経済関係のもっとも発展している中央諸県から、辺境に移住するというようにして、第二には、地方の住民のなかに、新しい小営業が形成さ

8) 同上、232ページ。См. В. К. Яценский «Историко-географические моменты в работах В. И. Ленина» (*Исторические записки*) No.27, 1948)

9) 同上、253-4ページ。

れ、また以前からあった営業が拡張されるというようにしてである。

これらの過程のうち、第一のものは、われわれがすでにさきにしめたあの辺境の植民の一つの現れとなっている。……ニジェゴロド、ヴラヂミール、トヴェーリ、カルーガ、等々の諸県の営業を行う農民は……『職人』がまだすくなく、稼ぎ高が高く、そして生活費の安い南部地方へとてかけていく。新しい土地に小営業がうちたてられると、それは新しい農民的営業の端緒となった¹⁰⁾。

このように、レーニンは「発展」において単にロシア資本主義の「内包的発展」の側面だけでなく、「外延的發展」の視角から、ヨーロッパ・ロシアの東部、南部の辺境地、シベリア、カフカースなどの発展をみている。

それでは、このような辺境地における資本主義の発展（外延的發展）と、ロシア中央部とりわけ中央黒土地帯に残存する農奴制の残滓との関係、あるいはロシア資本主義発展全体との関係を、レーニンはどのように見ているであろうか。

農民の移住の意義について、レーニンは次のようにいう、「移住の動きの発展は、農民層の分解、とくに農耕農民層の分解に巨大な刺激をあたえている。……農民は主として農業諸県から移住している（工業諸県からの移出はまったくとるにたりない）、しかもまさに（農民層の分解をはばんでいる）雇役のもっとも発展している、人口稠密な中央諸県から移住している。これが第一。第二に移出地方からでていくものは、主として中位の資産をもつ農民であるが、郷土にのこっているものは、主として農民層の両極の群である。こうして、移住は転出地における農民層の分解を強化しており、そして分解の諸要素を移住先にもっていつている（シベリアへの新しい移住者は、彼らの新生活の初期には、雇農として働く）¹¹⁾。

このレーニンの言及から、ロシア中央部の農民の辺境地への移住が、辺境地における農業資本主義を急速に発展させるとともに、中央部農業においても封建制の直接の残存物である雇役制をほりくずし、農民層を分解させ、資本主義を発展させる、という考えがしめされている。

また、ロシア資本主義全体の発展との関係については、レーニンは次のような側面にも注目している。

「ずっと以前から人の住んでいる古い地域における資本主義の内包的発展は、辺境の植民地化の結果、阻止される。資本主義に固有な、そして資本主義によって生みだされる諸矛盾の解決は、資本主義がたやすく外延的に発展できる結果として、一時延期される。たとえば、工業のきわめて先進的な諸形態と農業のなかば中世的な諸形態との同時

10) 同上、345-6ページ。

11) 同上、174-5ページ。

的存在は、疑いもなく矛盾である。もしロシアの資本主義には、農民改革後の時代の当初にすでに占拠されていた地域の限界をのりこえて拡大する場所がどこにもないとすれば、資本主義的大工業と農村生活における古風な諸制度（農民の土地への緊縛、その他）とのあいだのこの矛盾は、急速に、これらの制度の完全な廃止へ、ロシアにおける農業資本主義のための道の完全な掃掃へと、みちびかずにはおかないであろう。しかし、入植される辺境に市場をさがしとめ、それを見いだすことの可能性（工場主にとっての）、新しい土地へ出かけることの可能性（農民にとっての）は、この矛盾の激しさを弱め、その解決をおくらせる。資本主義の成長のこのような遅滞、がきわめて近い将来におけるそのなおいっそう大きな、いっそう広範な成長の準備と同じであることは、いうまでもない¹²⁾。

ここでは、レーニンが、資本主義がたやすく外延的に発展できる結果、資本主義の発展、諸矛盾の解決が一時延期させられること、しかし、このことは、近い将来の資本主義のなおいっそう大きな、いっそう広範な成長の準備と同じである、従って、矛盾は不可避的に解決されるといい、基本的には上述の、資本主義発展を促進するという意義を再確認している。

ロシアの植民地における急速な資本主義の発展の、ロシア中央部における資本主義発展に与える影響とともに、この認識を基礎としてレーニンは、ロシア中央部と辺境地における農業の進化のちがいに注意しはじめた。

「合法マルクス主義者」ペ・スクヴォルツォフとの論争（1900年、「非批判的批判」）において、レーニンは次のように、そのちがいを述べる、「……農民が解放にさいして土地を手に入れることが多ければ多いほど、またその土地が、安価であればあるほど、ロシアにおける資本主義の発展はますます急速に、ますます広範に、またますます自由に進行し、住民の生活水準はますます高いものとなり、国内市場はますます広範となり、生産への機械の適用はますます急速に進む、一言でいえば、ロシアの経済的発展はアメリカの経済的発展にますますよく似たものとなるであろう、と。こののちの意見の正しさを確認するものと私には思われる、二つの事情を指摘する……。(1) 土地不足と租税の重圧のため、わが国で非常に広大な地域において発展したのは、私有地経営の雇役制度、すなわち農奴制の直接の残存物であって、決して資本主義ではなかった。(2) 農奴制度をまったく知らなかったか、あるいはそれがもっとも弱かったわが国の辺境地方、農民が土地不足や雇役や租税の重圧のために苦しむことがもっとも少なかったところにおいてこそ、農業における資本主義はもっともよく発展した¹³⁾。

12) 同上、630ページ。

このような、農業進化のちがいが(=辺境地農業のより急速でより自由な資本主義的發展)についての考えは、ツァーリ政府の1901年6月の、「シベリヤ官有地の民間への払下げに関する法律」に対する考察により、より明瞭になる。

レーニンは論文「農奴主たちは仕事をしている」(1901年9月)において次のようにいう、「この(ツァーリ政府の——引用者)土地政策を近代的先進国、例えばアメリカの土地政策と比較してみるなら、どうしてこれを農奴主的と呼ばずにいられようか? あちらでは、だれひとり、移住の許可・不許可などということをあえて議論するものはない。なぜなら、すべての市民がどこへでも自分の好きなところへ移住する権利を持っているからである。あちらでは、農業経営に従事したいものはだれでも、国の辺境にある自由な土地を占有する法律上の権利を持っている。あちらでは、アジア的大寸たちの階級ではなくて、精力的な農業経営者の階級が作りだされており、彼等は国の全生産力を発展させた。あちらでは、自由な土地が豊富にあるおかげで、労働者階級は生活水準の高さの点で第一位を占めるようになった」¹³⁾。

ここでは、単にアメリカの土地政策とツァーリ政府のそれとの対比が行われているのではなく、ロシアの辺境地における資本主義の発展(=アメリカの土地政策)と、それを抑圧、制限し、農奴主的諸関係をもちこもうとするツァーリ政府の土地政策が、対抗関係としてとらえられている。

以上のべた、辺境地における農業進化(アメリカの経済発展)の優越性、アメリカの土地政策とツァーリ政府の土地政策との対抗関係としての把握の仕方は、次の「二つの道」理論(アメリカ型の道と、プロシヤ型の道の対抗)へと発展させられていく。

II 「二つの道」理論段階における辺境地論

1905年から1907年にかけての第一次ロシア革命における、全ロシア的な農民の大闘争をへて、レーニンの農業理論は、「いっそうすすんだ問題」¹⁴⁾の解明へと向けられる。この意味におけるレーニンの主要著作は、「ロシアにおける資本主義の発展」第二版序文

13) 同上、660-661ページ。См. Е. И. Дружинина «В. И. Ленин о развитии капиталистических отношений в южных и юго-восточных районах Европейской России» («Актуальные проблемы истории России эпохи феодализма», наука, 1970)

14) 邦訳レーニン全集第5巻、91-92ページ。ロシア語第五版における、「農奴主たちは仕事をしている」準備資料においては、当該箇所は次のようである。「辺境の自由な土地に対するブルジョア的(moderne)政策は、それらを農業企業家や農民に売ることであり、大量の富裕な住民をつくりだし(アメリカのように)、ブルジョアの生産物に対し巨大な需要を示し、すべての産業活動に未曾有の活気をひきおこす。農奴制的政策は、移民の圧迫、住民のあらゆる移動の官僚主義的干渉、奴隷を用いて収入を得る巨大土地所有者に(直接、または売却、賃貸の形で)国庫地を分配することにある」(стр. 395-401)

15) 邦訳レーニン全集、第16巻、122ページ。

(1907年7月),「1905—1907年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」(1907年11月—12月),「イ・イ・スクヴォルツォフ・ステパーノフへの手紙」(1909年12月)に代表される。

この段階で、レーニンは、農奴制的巨大土地所有が農民闘争の核心であること、商品経済と資本主義との発展は絶対的な不可避性をもってこの残存物を始末するが、この発展の形態は二つありうる、という有名な「二つの道」の理論を展開する。

レーニンは「1905—1907年の第一次ロシア革命における社会民主党の農業綱領」において、「ブルジョア的な農業進化の二つの型」、「革命における農業綱領の二つの方向」のち、「問題の新しい、きわめて重要な側面の検討」として「七、ロシアの土地面積、植民問題」をのべる。

まず、「辺境」とはどんなものか、その経済的意義はどのようなものかについて、プロコボヴィチ、メルツァゴの小冊子「ロシアにはどれだけの土地があり、われわれはそれをどのように利用しているか」から、「ロシア全国の土地面積」を示し、「ロシアにはどれほど広大なはてしない土地があるか、辺境地方とその経済的意義についてわれわれはまだどれほどわずかしか知っていないか」¹⁶⁾と語り、しかし、「これらの土地が現在、また現在の形のままで、ロシア農民の土地需要をみたすのに役立つと考えたら、それはもちろん根本から誤りであろう」¹⁶⁾といい、この点で、平方ヴェルスタ数に関する資料を基礎にして、移住のための空閑地をさがしもとめることをあざわらっている」¹⁶⁾、自由主義的なア・ア・カウフマンの批判は完全に正しいとする。

しかし、また、「『いまのような移民の選び方、彼等のいまの生活態度、彼等のいまの文化水準では』、……移住によってロシア農民の必要をみたすには、土地は絶対に不足している。したがって、……ヨーロッパ・ロシアの私有地の強制収用が必要である」¹⁷⁾というカウフマンの議論を、レーニンは「自由主義的＝ナロードニキ的な議論」である、と批判する。その論拠は、この議論は、「もし移住に適する土地が十分にあるなら、農奴制的巨大土地所有に手をふれなくともよからう」という結論がでるようにしくまれており、「重点は、ロシアの巨大土地所有の農奴制的な階級的性格にはおかれないうで、諸階級を和解させ、地主のきげんをそこねずに百姓を満足させる可能性、『社会平和』の可能性にうつされている」¹⁸⁾ということであり、この議論をさかさまにしなければならぬ、とレーニンはいう、「ロシアの農民は、農奴制的巨大土地所有によっておさえつけられているから——だから、ロシアの全領域に人口を自由に分散居住させることも、ロ

16) 邦訳レーニン全集、第13巻、245ページ。

17) 同上、246ページ。

18) 同上、247ページ。

シアの広大な辺境地方の土地を合理的に経済上利用することも、信じがたいほど妨げられている。また、農奴制的巨大土地所有がロシアの農民をうちのめされた状態につながり、雇役と債務奴隷制とによって土地経営のもっともおくれたやり方と方法とを永久化しているから——だからロシアの未開発地のうちから、いまわれわれが利用している土地とは比べものにならないほど多くの土地を、経済上利用するために必要な、農民大衆の技術的進歩と知的向上も、その自立性、教養、イニシアティブの向上もむずかしくなっている。なぜなら、農奴制的巨大土地所有と農業における債務奴隷制の支配こそは、それに照応する政治的上部構造¹⁹⁾の支配、普及を意味しているからである。したがって、「ロシアの膨大な植民予備地をひろく利用するための条件は、農奴制的関係の圧迫から完全に解放された真に自由な農民を、ヨーロッパ・ロシアにつくりだすこと²⁰⁾であり、「ヨーロッパ、ロシアにおける農奴制的巨大土地所有の没落につづいて、生産力のものすごい向上、技術と文化水準のものすごい上昇が不可避免的に生じること²¹⁾は、明白である、とする。

「この事情は、アメリカ型によるロシア農業のブルジョアの進化の経済的基礎をなすものである」。ヨーロッパの諸国家とちがって、「ロシアでは、農業技術の前進の一步一步、住民の現実の自由の発展の一步一步が、古い土地に対する努力と資本との追加的投下の可能性をつくりだしているだけでなく、それとならんで存在する『無限』の新しい土地を利用する可能性をもつくりだしているという、そうした条件のもとで、ブルジョア民主主義変革が行なわれるものである²²⁾。

ここでは、もはや、辺境地は、ロシア資本主義の外延的發展、ヨーロッパ・ロシア中央部との社会的＝地理的対比、農業進化のちがいが、の視点からとらえられているのではなく、農奴制的諸関係との対抗関係における、資本主義發展の二形態の中にはっきりと位置づけられてとらえられている。それは、レーニンが次のように言っていることから、また、明白である。

「ロシアの農業中心地とロシアの農業辺境地方とは、農業進化のそれぞれの型が支配的な地方の、いわば空間的な、あるいは地理的な分布をしめしているのであるが、しかし、それぞれの進化の基本的な特徴はすべての地方ではっきり見られるのであって、どこでも地主経営と農民経営がならんで存在している。……農業進化の二つの流れは、どこにでも存在している。農民の利益と地主の利益との闘争は、改革後のロシアの歴史全体を赤い糸のように貫いている²³⁾と。

19) 同上、247ページ。

20) 同上、249ページ。石渡貞雄「小農経済学」1970、92-93ページを参照。

21) 邦訳レーニン全集、第13巻、250ページ。

さらに、このことは、ロシアにおけるアメリカ型資本主義発展の経済的基礎をなすものであり、ヨーロッパ資本主義諸国とロシアとの資本主義発展のちがい（ロシア資本主義のアメリカ型発展の特殊性）として、アメリカ型の道の勝利のために全力をつくすボリシェビキ党にとって、きわめて重要な意義を持つ問題であると考えられたのであった。

このような視角からレーニンは、全ロシア的な農業危機をもたらしたストルイビン政策の、二つの主要な「切りふだ」²²⁾、移民政策と、フートル政策のうちの一つ、移民政策に注目する。「移民問題」(1912年6月)において、レーニンは次のようにいう:「疑いもなく、移民が正しく組織されたなら、それはロシアの経済的発展のうえで、ある程度の役割を演ずることができるであろう」²³⁾。

「……シベリアには土地の予備がまだあること、したがってそこへの移住は、それが目的にかなうように組織されていさえすれば、シベリアにとっても、ロシアにとっても、ある程度の意義をもちうるであろうということには疑いない。」²⁴⁾しかし、この条件をツァーリ政府は全くもたない。「移民事業の今日の組織は、わが国の『旧制度』が住民のきわめて基本的な経済的要求を絶対にみだすことができないことを……証明している。」²⁵⁾

カフカーズ、シベリアに対する、移民政策、移民事業の実態を暴露する国会議員の演説により、レーニンはこのことを実証する。

1913年4月、「移民事業の意義」において、レーニンはさらに、この問題を発展させる。

「その(シベリア移民——引用者)結果はどうだったか? 矛盾は緩和されたか、それとも、より広大な舞台への移民とともに、それはいっそう激化したであろうか?」²⁶⁾と問題をたて、次のような「農民のシベリア移民についての、一般的な数字」をあげる。

「お上の移民奨励者が大気を稀薄にすることができたのは、せいぜい4年間(1906~1909年)そこそこである。それ以後はもう新しい危機がはじまっている。……『逆移民』の数が……増

年次	移民数(千人)	逆移民の%
1905	89	10
1906	141	4
1907	427	6
1908	665	6
1909	619	13
1910	316	36
1911	183 ²⁷⁾	60

22) 同上, 237ページ。

23) 邦訳レーニン全集, 第19巻, 183ページ。

24) 邦訳レーニン全集, 第18巻, 85ページ。

25) 同上, 86ページ。

26) 同上, 49ページ。

27) この数字はレーニンも注釈しているように、11ヵ月間の数字であり、1911年全体としては189,000人である。(邦訳レーニン全集, 第18巻, 184ページ)

加しているのに……移民の数がおそろしく低下しているということは……非常に重大な、はるかに広大な舞台をとらえた危機を意味」²⁸⁾する。

「36%と60%という逆移民、それは、ロシアでも、シベリアでも、危機が激化して、いることである。ロシアへは、きわめて不幸な、すべてを失い、憤りにもえた貧民が帰ってくる。数十万の移民を——政府の必死の努力にもかかわらず——落ちつかせることができなかったところを見れば、シベリアでは土地問題は極度に尖鋭化したに相違ない」²⁹⁾。

1913年5月「ふたたび移民事業について」において、レーニンは、沿ヴォルガ地方をもとらえた、移民の波について論じる：

「問題はどこにあるのか？

1911年の『不作』、飢饉にある……飢饉はロシアの新しい地方をとらえた。シベリアへの、飢民の逃亡の新たな波。シベリアがロシアの中央部の農民についてさらに沿ヴォルガ地方の農民をも、いっそうひどく零落させ、恨みをいだかせるであろうということのをわれわれはもう知っている。……シベリアへの移民は、最初は中央部の農民、こんどは沿ヴォルガ地方の農民にたいするそういう救済が不可能であることを、実際にしめしたのである。『新』農業政策は、ロシアのある地帯について他の地帯を、ある地方の農民について他の地方の農民を、つぎつぎに零落させることによって、真の救済がそこにあるのではないことを、しだいに、すべての農民のまえに、あきらかにしつつある」³⁰⁾。

ま と め

「発展」の段階においては、ロシアの辺境地は、ロシア資本主義の外延の発展の視角から分析された。資本主義の外延の発展の結果、資本主義に固有な矛盾や資本主義によって生みだされる諸矛盾の解決は一時延期させられるが、しかし、この発展は同時に資

28) 邦訳レーニン全集、第18巻、49-50ページ。

29) 同上、50ページ。

30) 同上、77-78ページ。Л. Б. Велявскаяによると、極東に対する移民政策においても同様な事態が生じている。「反動時代において、逆移住者は驚くべき広い範囲にわたった。1906—1914年までに、50万人以上（移住者の16.9%）がウラルから帰還した。……もっとも貧しい移住者のみでなく、過去に中農、富農であった者でさえも、帰還した。……移住者の圧倒的多数は、極東の慣れない生活条件における数年間の間断なき困難な闘争の後に、帰還したことを統計は示している。1912年の810人の帰還者のうちで、35.4%は3年滞在、26.3%は2年、17.1%は1年、21.2%は1年以下の滞在である。1913年には、487人のうち、3年滞在は38.6%、2年滞在は9.8%、1年滞在は42.3%、1年以下は9.3%である。……零落し、激怒した帰還農民は革命的活動に積極的に参加した。」とのべている。Л. Б. Велявская «Социально-экономические последствия переселенческой политики Столыпина на Дальнем Востоке («Особенности аграрного строя России в период Империализма») А. Н., 1962.)

本主義のより大きな発展の準備である、という点で、ロシアの辺境地における資本主義の発展は、ロシア資本主義全体の発展をうながし、はやめる要因としてとらえられたのであった。

「二つの道」理論段階においては、この問題はより発展させられる。アメリカにおけるような自由で急速で広範な資本主義の発展、(つまり辺境地にみられたような資本主義の発展)は、「アメリカ型の道」として、農業構造的に把握され、そのような発展をまったく許さない、農奴制遺物を最大限残存させて資本主義的に進化する「プロシア型の道」と対置させられたのであり、辺境地における自由な資本主義の発展は、「アメリカ型の道」が勝利して、はじめて可能になるとされた。

ロシアの辺境地に対するレーニンの以上の研究はわれわれにさまざまな研究課題を残している。A. B. ファデエフが提起する、レーニンのツァーリ専制の規定＝「軍事的・封建的帝国主義」の経済的基礎をこの辺境地への進出にもとめようとする試みもその一つである。しかし、さらに重要な課題は、レーニンのこれらの考えを具体化し、発展させて、ロシア資本主義発展を全体的に把握していくことである。